戦姫絶唱シンフォギア　アルケミック・シンフォニー

謎のコーラX

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

錬金術師　パラケルスス

彼、彼女はバヴァリア光明結社の最高顧問ではあるが、各地を２体のオートスコアラーと共に放浪している。

天唱寺　鈴花（てんしょうじ　すずか）

天鞋タラリアに選ばれた最適合者　正義を志す、武闘派慈善集団パラダイスに所属する少女。

これはギャラルホルンが導いた可能性。

そこだけに存在する錬金術師　奏者達はこの世界を生きていく。

目次

序章①　パラケルススという錬金術師 ―― 1
序章②　卑しき錆色 ―― 5
序章3　道具 ―― 9
序章④天鞋タラリア ―― 13

序章①　パラケルススという錬金術師

「いいお医者さんになるのよ、テオ」
母はそう言って、私が１０の頃に亡くなった。
母は教会隷民、いわゆる教会に属する奴隷だった、母は死ぬまで私を愛して、この世を去った、あのときに、今ほどの、化学、医学があれば母は死ぬことは無かっただろう、しかし、それは結果論であり、私は先を見ている。それに、あのときのことがあったから、私はここまで来られたのだから。
私に自然哲学や、化学、医学を教えたのは父だった、真面目な人で、今死んだ後でも尊敬できる、が、放浪ばかりしてきた人でもある、まぁ、私もやってることだが。
金属は害だ、人には鉄が流れているとも言うのだから、全て害があるわけではないが、致死量、あらゆるものは人を死に至らせる、私はそう考えた。
あれから、５００と余年、私は今――錬金術師となっていた。完璧なる、生命を目指して。
○
「――パラケルスス様」
そう呼ばれ、見た目だけは少女のパラケルススは目を開く、何時もの研究机で、研究を行っていた。
目を擦り、欠伸をすると、後ろに立つ、自らの従者に目を向ける。
「やぁ、トロン、今日も良い朝だな」
トロン、パラケルススが初めて創造した2体のオートスコアラーの一人であり、日々パラケルススの手によって改造され、人間とほぼほぼ変わらないレベルの見た目となっている。トロンは眉を潜め、ため息を吐いて、暗い室内のカーテンを開き、日の光を入れる。
「既に真昼です、寝すぎなんですよ、そもそもその身体に睡眠は必要ないでしょう？」
「いんや、眠りは良いぞ、記憶も整理できるし、自分が思いもしない夢を見せてくれる」

「だからといってこんなに遅くまで寝てるのはどうなんですか……はぁ、ワタクシは準備しておきます、ご存知でしょう？、今日がなんの日か」
　トロンからそう言われ、パラケルススは手のひらに拳を置く動作をした、トロンはその動作の意味を知ってる、あ、忘れていたんだと、備えられたトロンの感情は怒りへと以降する。
「――殴りますよ？」
「やめておけトロン、それは私には効かない」
　次の瞬間、外にいたもう一人の従者は研究室の壁が吹き飛んだのを確認した。
　○
「ふー、こういうの私の仕事ではないと思うけど」
　パラケルススは研究衣から私服に着替えた。赤と白色を基調とした服装で、彼女がよく着る服だ。
「んー、ボクとしてはもっと派手がいいなぁ、その服、もっとギンギラギンにしてさ」
　壊れた壁を直しているときもう一人の従者が悪戯気にパラケルススの目を両手で後ろから覆う、名をルフォン、トロンの白髪とは反対の黒髪、トロンの妹のオートスコアラーであり、トロンと共に家事全般を行い、戦闘も行える、ちなみにトロンが大好き。
「別に目が見えなくても直せはするが、そういうのは誰だって言ってやる行為だぞ、おと服は変える気はない」
「くふふ、そっかぁ、くふ、トロンにこっぴどくやられたねぇ、無傷だったみたいだけど」
「まぁね……いい加減手をどかしてくれないか」
「やっ」
「……」
　それから一時間は、ルフォンは手をどかすことは無かった。
　○
「……さて、なんだっけ、何時もの構成員に反乱であってる？、で、その排除を任せられたであってる？」

「そうです、正直過剰戦力な気がしますけどね、アダムが言うには知りたいんだ、今の君の力量をね、らしい」
「あの怪物かぁ……逆らっても良いことないし、ま、気長に行こうか、トロン、ルフォン」
「はい」
　トロンは綺麗な笑みで答え。
「うん」
　ルフォンは若干邪悪さのある笑みで答える。
　○
「ふーん、ここがアイツらのハウスね」
「ハウスと言っても洞窟ですけどね、それも巧妙に隠されてるかつ、廃鉱の流用」
　ぱっと見では洞窟の入口は落石で閉じてあるが、認識誤認がかけられていることが3人にはわかる、それなりのもので触れればちゃんと岩の感触もある。一般人ならまずバレないだろう。
「さて、ルフォン、お前は出てきたやつの対処だ」
「え～、ボクも戦いんだけど、なんのために邪悪スマイルしたと思ってるのー」
「お前の機能でやってみたシュミレーションしてみろ」
「――あー、うん、でも機能使わなきゃいいでしょ」
「食い下がるな、雑魚掃除がそんなに楽しいか？」
「楽しい！」
（いったいどうしてこんな性格になってしまったのか、創造主でもわからない、ワカラナイ）
　パラケルススが頭を悩ませていると、トロンがため息を吐きながら、ルフォンの肩を叩く。
「ルフォン、ここは引き下がってくれ、計算上ルフォンが来ないほうが１００％帰ってこれるんだ、お前もパラケ」
「わかった！」
（食い気味……ですね）
「んじゃ、トロン、行こうか」

「はい」
「いってらー」
パラケルススとトロンは軽く岩を弾くと、一瞬で認識誤認の術は霧散し、二人はルフォンに見送られながら、先に進んでいった。

序章②　卑しき錆色

『な、なんでこんなところにあのパラケルススがいるんだ!?』
『げ、迎撃!、迎撃するんだ!』
「……脆い」
　オートスコアラー……の、紛い物のゴーレム、パラケルススはそれらを軽く手を振るうだけでバラバラにしていく、数十はいたゴーレムも数秒で全て倒され、そこにいる錬金術師の攻撃も、過剰ながら参重層術式防護（ヘルメス・トリス・メギストス）をパラケルススの長年の研究で、自動発動させて防いでいる、パラケルスス自身、これの精度を試すのも目的ではあるが。
（やばいな、弱い、弱すぎて普通に受けても服に傷一つつかないぞ）
　ここの錬金術師に落胆しながら、別の道に向かったトロンのことを思いながら、先に進んでいく。
　数分ほど経つと、一番奥らしい、広い場所に出る。
「最奥かな、さて」
『くく、よく来たね、パラケルスス』
　中央には一人のリーダーらしき錬金術師がいる。
『だが!、我らがファウスト様の教えを受けて作り出したドラゴン!、さすがのパラケルスス様でも勝てますかね』
　錬金術師は地面の大きな方陣に触れると、方陣から巨大なドラゴン?が、出てくる。
「……ふぅん……やたら大きな蜥蜴だな」
　パラケルススはつまらなさそうにドラゴンが振り下ろす鉤爪を、受け止める。
『なっ!?』
　錬金術師は驚愕した顔になる、こうも簡単に防がれるとは思わなかったんだろう。
「ヘルメス・トリス・メギストスを使う必要もないな、はぁ」
　次の瞬間、ドラゴンの身体が止められている鉤爪から黄金に変わっていき、数秒で、完全に黄金の象に成り果てた。
『こ……ここまでだったとは、だが!、私にはまだ奥の』

ドス、錬金術師の胸が地面から生えた炎の柱によって貫かれて、身体は宙を舞う、そのまま地面に、落ちて、その錬金術師の生命は終了した。
「雑魚でしたね、ここの人達」
右側の壁の向こうからトロンが姿を見せる、その身体には傷一つなく、こちらも何の苦戦も無かったのだろう。
「あぁ、さて……戻るか」
パラケルススは懐からテレポートジェムを取り出す、トロンを抱き寄せて、それを地面に、落とすと、方陣が現れて二人の身体はその方陣の中に沈んでいく。
○
「はぁ……はぁ、そろそろ外かしら、二人とも、ちゃんとついてきてる！」
「大丈夫であります、ちゃんとケースに乗って追走してるであります！」
「あたしも飛んでるから大丈夫だぜ！」
3人は必死に外に向かっている、3人は卑しき錆色、失敗作としてここの錬金術師達の実験動物として隔離されていた、3人は急な襲撃によってここの錬金術師達は死に、今脱出しようとしている。
光が見え、彼女らは外にたどり着く、そこには。
「な！、まだ残党が!?」
一番年上のサイボーグの身体の彼女はルフォンを認識すると、戦闘形態に入り、5指から小型ミサイルを放つ。
「んー?」
ルフォンはそれらを片手で受け止め、握り潰した。
「あんたらは……あぁ、錬金術師達の実験動物か」
「くっ……」
サイボーグの女性は、明らかに実力差のあるルフォンにたじろぐが、後ろの二人を守るために前に出る。
「ルフォン、そいつらは敵じゃないぞ」
サイボーグの女性が向かっていこうとした時、地面から方陣が現れ

て、そこからパラケルススとトロンが出てくる。
「新手!?」
「……ふむ、貴方達、名前は」
「え?」
「名前、あるんだろ」
サイボーグの女性は、後ろの二人と目配せして、名乗った。
「私はヴァネッサ」
サイボーグの女性
「あたしはミラアルク」
蝙蝠のような翼を生やした少女
「わたくしめはエルザであります」
獣耳を生やした、スーツケースに乗った少女。
「ふむ……一つ提案なんだが……うちに来ないか?」
「な!?、そんな提案……いや、待って、もしかしてあなた、パラケルスス様!?」
ヴァネッサは記憶をたどり、まだ人間だった頃にたまたまアダムと一緒にいたパラケルススの顔を思い出した。意外な重要人物、実質的なバヴァリアのトップが自分らに現れたことに困惑した。
「そ、そんなお人が、何故私達を……」
「なに、不完全ながら、強い力を感じられてね、じゃあもう一つ条件を。貴方達のその呪いだと思ってるそれ、今は無理だけど、私が解いてあげようか」
「!?」
バヴァリアで一番に錬金術を扱える人、そんな人から自分らを人間に戻してくれる、彼女にはそれは望んでいた提案だった。
「……本当に?」
「嘘をつく理由があるかな」
「……二人はどう思う?」
「あ、あたしは……可能性でも人間になれるなら、受け入れたいと思ってるぜ」
「わたくしめも……おなじであります」

二人の了承を得ると、ヴァネッサはパラケルススの手をとる。
「では、お願いします、私達のことを」
「ん、じゃあ…行こうか」
パラケルススはテレポートジェムを取り出して、それを再び地面に落とす、前よりも大きな方陣が現れて、６人は方陣の中に沈んでいった。

序章3　道具

「ここが……あなたのお家ですか」
　ヴァネッサらの目の前には漫画やアニメでありそうな豪邸がそこにはあった、一部新しくなってるが、気にならないくらいには綺麗に管理されていることが伺える。
「さて、最初に言っておくが、私はお前らを道具として招いた、そこは忘れるなよ」
　3人は少しわかっていたのか少し悲しそうに俯くがすぐに覚悟を決めた顔になる、あそこよりはマシな生活ができる、なら掃除も汚い仕事もやってやる。
　と、思っていたが、すぐに考えは疑問に変わる。
「――ん？」
　二人は今風呂に入っていた、身体も髪も、ルフォンとトロンによって洗われ、スッキリした感じだ。
「あの……えっと」
「ん？、ワタシに何かなエルザちゃん」
「わ、わたくしめ達は道具として、ここにいるわけでありますが、何故」
「ん？、パラケルスス様が言うには道具は綺麗なほうが良いとのこと、あ、ヴァネッサさんは風呂はショートする可能性あるからパラケルスス様の手で綺麗にしてもらってる」
「な、なるほど」
　これが終わったら本当に奴隷として働くと、思ったら。
「……えっと、あたしらの目の前にあるこれって」
　二人の目の前には豪華な食事があり、何日も食べてなかった分、かなりお腹が鳴る。
「食べろ、まともに動けない道具はいらないからな」
　パラケルススも手を合わせた後、目の前の食事を食べ始める。
「お、おう」
　それから3人は充実した日々を送った、衣食住から娯楽、できなかった勉強まで、パラケルススは与えてくれた。

そして、3人は、地下の訓練場まで連れてこられた。
「さて、君らの能力を十分に扱えるように、僕ルフォンが、鍛えてあげよう、まともに力を使えない道具はいらないとのパラケルスス様から言われたしね」
「なんかやっと厳しいやつが来たでありますな」
「おう、あたし達本当に充実した日々を一週間おくったぜな」
「二人とも、さすがに真面目にやりましょ、それで、ルフォンさん、何から始めるのかしら」
「はい、まずは――」
それから3人は自らの力を扱うために、ルフォンの指導のもと、研鑽を積んだ、自らの弱点、長所など様々なことを克服、成長させていった。
ある夜、ミラアルクとエルザは、パラケルススの研究室に忍びこもうとしていた。
「本当に、あたしらを治すつもりなのか調べてやるぜ」
「でも、バレたらどうするでありますか？」
「その時は……謝るしか無いかな」
二人は隠れながら、研究室に入っていった、そこにはパラケルススが一人、机の上にある、何かとにらめっこしていた。
「……駄目だな、やはりまだまだ私も不足してる」
そこにあるのは、前に二人からとった一部の皮、すぐに治してもらい、痛みも無かった、それらに様々な術を当ててるが変化が無いようだった。
「……私のこと、やはり信用できないかな、道具ども」
「!?」
二人は気づかれていたことに驚き、渋々パラケルススの目の前に現れた。
「その……すみませんであります」
「あたしら、あんな場所にいたもんで……」
「別に怒ってはいない、当然だからな」
「……あの、ヴァネッサのほうはどうなんでありますか」

「あぁ、それなら最初にあったときから既に人間に戻す方法は考えついてる」
「な!?、なら何故まだあのままなんでありますか!?」
「そうだぜ!、なんで――いや、もしかして」
二人は怒るが、すぐに理由を思い至る。
「……わたくしめらが、人間に戻れないから、でありますか」
「正解、本人が二人が人間になれないなら、私だけ先になるわけにはいかない、だそうだ」
「……ヴァネッサ」
二人は、涙を流し、すぐに研究室から出ていった。
「……本当にいい道具達だな」
○
「……パラケルスス様、見てもらいたいものがあります」
それから一年後、3人は下手な錬金術師には負けないほどの力をつけ、パラケルススに従う化け物、そして、自分達をノーブルレッドと呼称するようになった。
「なんだ道具、研究室まできて」
「はい、これなんですが」
ヴァネッサは手にディスクを装填すると手のひらから映像を映し出す。
そこには錬金術師達を相手に、いや、アルカノイズも含めた相手を圧倒する、3人の少女達が映っていた。
「ほう、これはまた」
「彼女らの素性は」
「いや、わかってる、何度か私も見たことあるからな……武闘派慈善団体　パラダイス、だろ」
「はい、そして彼女達が身につけているのは、聖遺物、それが鎧となるモノだそうです」
「ふむ、ファウストローブと似たモノか……わかった、さがって良いぞ」
「うふふ、わかりました、それで休日の話なんだけど」

ヴァネッサは艶かしく、パラケルススの隣に椅子を持ってきて座る
「なんだ」
「お姉さんとショッピングとか」
「いかない」
「えー！、女の子なんだしもうちょっとオシャレとか」
「いらない、ほらちれちれ」
「むぅ……また誘うからね！」
ヴァネッサは不満げに頬を膨らませて、研究室から出ていった。
「……パラダイス、ね」
パラケルススは彼女達のことを思いながら、研究を続ける。

序章④天鞋タラリア

天鞋(てんかい)タラリア

　現存する聖遺物を使った歌うことで鎧を身に纏い、戦う、シンフォギア、その中で唯一空に飛べる機能を有している。

　櫻井了子によってもたらされたパラダイスのシンフォギアは3つ、天鞋タラリア　聖盾(せいじゅん)プリドゥエン　双刃干将(そうじんかんしょう)・莫耶(ばくや)3つとも性能は良いが、本来のより扱いが難しいものとなっている。

　そして、今、3つのシンフォギアの適合者が、錬金術師と戦おうとしていた。

「ふむ、多いですね、だけど質は悪い」

騒ヶ原(そうがはら)リリィは遠くにいる、スコープごしに街に近づいてくるアルカノイズを見ている。

　騒ヶ原リリィ、英国と日本のハーフ、日本育ちの少女であり、プリドゥエンの適合者、商人の英国の父親を持ち、自らも商いを好み、物を見て価値をどれほどなのかを考えることが多い、その中には生きてる生物も含まれる。

「オー、それはたいへんネ、わたくしにげちゃダメ？」

「駄目に決まってるでしょ、大人しく準備運動でもしてて」

　リリィはチーフーを逃げようとするのを首根っこを掴んで止める。

黒・曲虎(ヘイ・チーフー)、中国の少女であり、中国武術の師範の父と母を持つ、自らも習っているが、相手が雑魚だとわかると途端にやる気を無くす、ノイズなどにはいやいやながらやってる。

「・・・そろそろかな」

「そうネー、ま、気楽にいきましょカ」

　鈴鹿はパラダイスの頭の娘である、本人が希望して入隊し、一番の戦績を出している、正義感が強く、悪と定めた相手には容赦がない。

「行こうか、チーフー、リリィ」

「「はい！」」

　3人はブレスレットのシンフォギアのコアを掲げる。

「ジャスライ・タラリア・トロン」

タイトル　正義の翼は何処までも届く。
「マネスト・プリドゥエン・トロン」
タイトル　我が盾は最上なり
「ストレアス・カンショウ・バクヤ・トロン」
タイトル　強者に備わるは黒と白の魂
３人は各々詠唱を行うと、光に包まれ、飛び立つ、光が収まると、鈴鹿には機械の翼を靴に生やした黄色の鎧、リリィには両手に半分ずつの盾がついた篭手をつけた赤のよろい、そしてチーフーにはアシンメトリーな黒と白にわかれた鎧に、黒と白の短剣を手に持っている。
「おさきだネー！」
まず前に出たのはチーフー、黒と白の短剣を振るい、高速でアルカノイズに攻撃のスキを与えない。
「速いなー、じゃあワタシもいきます」
リリィも篭手を合わせると変形し、一つの大きな盾を作り出すと、こちらも高速でアルカノイズに突進していく、次々と吹っ飛ばされ、まるでトラック、あるいはサイのようだった。
「じゃ、僕も行くか」
鈴鹿は飛行を始めると、空中にいるアルカノイズを二人より数段速い速度で蹴散らす、そしてアルカノイズは3人によってものの数分で、千体を倒した、残った錬金術師も速攻で倒される。
「はぁ、やっぱり物足りないネ、こんなのじゃもっともっともっとやりたいヨ、スズカどうネ？」
「やらないよ、大人しく次の命令を待ったら？」
「むぅ、イケズですネ」
チーフーは頬を膨らませ、地団駄を踏む。
「……はい、はい、それじゃあ後ほど」
リリィはスマホの電話を切ると、ため息を漏らしつつ、告げた。
「鈴鹿、チーフー、転勤だ、それも日本までね」
「ワオ」
「日本……か」
日本、櫻井了子がいる国、各々思うところがあるが上の決定、３人

はそこに向かうことになる。